

令和8年度 第1回 山形市総合学習センター運営協議会

令和8年5月29日(金)

15:30~16:45

会場:多目的研修室

I 出席者

【委員】津留俊介委員、戸田雅大委員、横倉晋也委員、阿部慶子委員
西村仁美委員、横山尚久委員、佐藤浩治委員、鈴木友香委員

(計8名)

【事務局】東海林総合学習センター所長

清野総合学習センター副所長(兼)ICT教育推進係長

白田総合学習センター副所長(兼)まなび支援係長

鈴木総合学習センター指導主事

高橋総合学習センター指導主事

志布総合学習センター指導主事

小川総合学習センター指導主事

菊地総合学習センター指導主事

伊藤総合学習センター指導主事 (計9名)



II 欠席者 関口雄一委員、星川仁一委員

III 傍観者 0名

IV 会議

1 開 会

2 所長あいさつ

3 運営協議会委員の自己紹介と職員紹介

所長より:会長、副会長について

会長:津留委員 副会長:阿部委員に承認をいただく

4 運営協議会長あいさつ(津留会長)

5 協議

(1) 令和7年度事業報告… 資料をもとに、事務局担当者から報告。

(委員) 理科研究相談会の相談内容はどんなものか。

(事務局) 自由研究や理科作品展に提出するためのアドバイスをを行っている。小学校に事前に公募し、その中から応募があったご家族に来てもらった。

(委員) 本センターの利用状況の推移が、平成28年から令和7年度まで7千人ほど減っ

ている。主催と一般の減少がこの原因になっているとみられる。どういう理由で減少しているのか。

(事務局) 詳しくは分析をしていないが、コロナ禍を経て一旦減少しており、その後増加はしている状況である。

(委員) 風の通級の人数の状況は、令和元年がピークで昨年度は25人になっている。市内の不登校が高止まりになっているが、風の通級人数が減っていることに対する分析はどうか。

(事務局) オンラインのフリースクールなど、様々な形態のフリースクールが展開されている。今後、フリースクールの利用数について把握していき、関連性をみていきたい。

(委員) 不登校の基本方針については、多様な学びをもたせていく、学校に通うことだけを目的としないというところがある。適応指導教室、居場所づくりなど様々な形態があるが、フリースクールとの連携については、どのように図っているのか。

風への登校が出席扱い制度になっているが、各学校で統一しているのか。

(事務局) フリースクールとの連携については、条件がありますが、該当される方には補助を受けられる制度を設けている。今後も、引き続き連携を図っていきたい。

風への通級は出席扱いにしている。出席の基準を学校教育課で定めている。フリースクールで学んでいることを学校と確認し、内容に応じて学校判断で出席扱いにしている。

(委員) 中学校は進学に向けて評価が関わってくると思うが、どのようにしているのか。

(事務局) その子供によってケースバイケースのところがある。子供にとって、オンラインなど可能な形で面談を行い、学習の状況を判断しながら進めている。

(委員) 働き方改革もあり、不登校児童生徒が増加している中、どこまで丁寧に把握していけるのか。

(委員) フリースクールについては、一昨年、県でもはじめてリスト化を行った。様々な形態のフリースクールが増えてきている。NPO法人、塾の延長上にあるもの、放課後等デイサービスなどもフリースクールに参入してきている。山形市では、4つのフリースクールを補助金交付の対象としている。学校の教職員がフリースクールに行き、学びがあるのかということについて職員に確認した上で、出席扱いにすることができる。教職員の負担のないでできる範囲内で、学習の足跡を積極的に残すようにしている。

(2) 令和8年度事業計画… 資料をもとに、事務局担当者から報告。

(委員) 教職員研修についてお聞きしたい。中核市になってから、学習センターで研修を行えることができるようになってきた。教職員の構成が変化し、若い先生が多くなっている。また、働き方改革も進み、先生方の資質も変化していると感じている。指導主事から見て、現在の先生方の課題や資質を伸ばしたいと捉える点は何か。

(事務局) 教員も若手が増え、経験年数が長い教員が少なくなっていることもあり、校内でも教えてもらえる機会が減っている。要請訪問の機会などを活用しながら、学校への指導も行っていきたい。

(委員) 研修に限らず、校内の組織自体が変わり、若手を育てていくということが難しい。時間外が難しく、職員室内も静か。一人でなんとか頑張っている若手の先生もいるのではと思う。研修では、先生方が孤立しないように、一人で悩まずつながれる場になるような研修の場を希望したい。

(事務局) 令和3年度から、2年次、3年次フォローアップ研修が設置され、若手の先生方

を大切に育てていこうとしている。継続していきたい。

(委員) 風でもタブレット、電子黒板を活用して指導しているのか。

(事務局) ICT機器内のソフトを活用しながら、学習を進めている。

(委員) 使うことが目的化されているが、何を学ぶかということが大切。小中学生だけでなく、保護者、教職員もスマホ世代。短絡的な思考になり、論理的な言葉でかえってくるのが少ないと心配している。理科センターで行っている実験教室などは、観察、実験など体験的な活動で非常にいい経験となっている。リアルとデジタルの融合が必要である。意味を理解しながら、理科教育の体験や観察など、五感で感じることを大切にしていきたい。

(委員) SNSの利用だけでなくAIの利用に頼っている。どんどん活用していいとは思いますが、一度反芻して自分の言葉で書くということ、ほとんどの人がやっていないのではないかと。学生になってからではなく、小中学校のうちから、自分で考えていくということについて、しっかり指導していくことが必要だと思っている。

(事務局) 情報化について、使うことだけを目的にしているのか、ということを考えていかなければいけない。子ども達にどのような資質能力をつけていくのか、深い学びにつなげていくか、ということについてしっかりと考え学校に伝えていきたい。

AIについては、タブレットの機能で、子どものAI活用を制限している。文科省からも活用する方法について示されている。働き方改革ということで教員が作成する文書などについては、うまく活用することも大切だと考えている。

先生方への研修会を実施し、情報化の光と影などについて伝えながら、授業にどのように活かせばいいのか、ということ研修した上で丁寧に進めていきたいと考えている。

(委員) 若い人をどうやって育てていくか。今の若い人は、失敗したくない、間違いをおかしたくない、という思いが強いように感じる。失敗して学習していく、という社会になってほしいと考えている。青少年の事件、トラブルに共通性があるように思う。成功体験だけでは生きていけない。自分ができることを相手にしてあげる、失敗を次に活かせる、みんなで助け合おうという教育ができないか、とつくづく思います。

(委員) 自己肯定感という言葉をよく聞く。自分でやってみようという気持ち、コミュニケーション能力が一番大切だと思っているが、それが少なくなっている。互いに言い合える状況になればと感じる。

6 その他

7 連絡

・次回の協議会について

令和9年2月3日(水) 午後3時30分～午後4時45分

8 閉会